

社会科

大 隅 一 浩
関 東 朋 之
多 田 涉
武 田 桂 輔

I 研究主題と社会科

1. 研究主題のとらえ方—教科の「目指す生徒像」

社会科では、研究主題及び1年次の実践を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、2年次の実践に取り組んできた。

【社会科の目指す生徒像】

社会的事象を多角的に捉え、民主主義を尊重し、よりよい社会を求めて、公正に意思決定できる生徒

前研究において、さらに進行していく人口減少やグローバル化を見据え、今後、社会を形成していくうえで必要と考えられる資質・能力の育成に努めてきた。本研究では、引き続きそれらの資質・能力の育成に努めていくにあたり、特に社会集団における意思決定に重点を置いていきたいと考える。意思決定とは、たとえば投票行動の場面などを想定している。数年後、生徒たちは確実に有権者となる。その際、社会的事象を多角的に捉え、民主主義を尊重して、公正に物事を判断していこうとする態度は、考え方の異なる他者とよりよい社会を形成していくうえで、特に必要な資質・能力であると考えます。

こうした問題意識の基、「多角的な見方」「民主主義」「公正」を、教科において重視する見方・考え方として掲げ、アメリカの社会科研究者エングルとオチョアが示した民主主義を担う市民に必要な意思決定スキル（奈須正裕・江間史明 2015『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』）を教科で育てる資質・能力と捉え、目指す生徒像に近付けていきたいと考える。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視している 資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・扱う問題に対する見方が自分と異なる人々の意見に共感できる。	・論争的な課題を扱い、様々な立場から多角的に問題を考える場面を設ける。
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・ある問題の大きさをはかり、対立するポイントや論争点を認定できる。 ・提案された解決策のいずれに対しても、起こりそうな帰結に至るまでのシナリオを構築できる。	・根拠と理由付けを明確にして意見をつくったり、他の意見の根拠と理由付けを批判的に見直したりする場面を設ける。 ・時間軸、空間軸、社会軸から問題を捉え、既習事項を踏まえて、問題の帰結を予想させる。
場に応じて判断基準をつくる力	・問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付けることができる。それらの情報の信頼性を判定できる。 ・証拠や判断の基準となる価値に対立が生じた場合、合理的な判定ができる。	・社会科の中で汎用的に使うことのできる概念的知識を整理し、年間指導計画に位置付ける。 ・判断基準を明示したり、判断基準を意識化させる問いを発したりして、活用させる。
学びを評価し、課題を見付ける力	・その問題を可能な限り（価値を含む）広い文脈において見ることができる。	・学んだことが概念的知識にまで高まるように、教師が生徒の発言や振り返りを評価する。

2. 研究のあゆみ

社会科では、前研究において、情報や考えを批判的に見直したり、判断基準を意識的に設定し意思決定や合意形成を行ったりする力については課題が残った。そこで、本研究では、論争的な課題の解決に向けて意思決定や合意形成を行ううえで、多様な考えの根拠と理由付けを批判的に見直す場面の設定や、民主的な視点に基づいて公正に価値判断を行う場面の設定を重視して、研究に取り組んでいく。2年次では、特に社会科で育てる資質・能力のうち「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付ける」力、「証拠や判断の基準となる価値に対立が生じた場合、合理的な判定ができる」力、「その問題を可能な限り（価値を含む）広い文脈においてみることができる」力の育成に重点を置いた。

具体的には、実際の社会で起こっている、あるいは起こりうる論争や議論の場を設定し、根拠と理由付けを明確にした考えを基に、ディベートや小グループでの意見交流などの対話的な交流を通して、意思決定や合意形成を行わせた。その際、議論を客観的に捉えさせるためにディベートのジャッジを行わせたり、根拠となる資料の信憑性や信頼性を検討するためにフィールドワークを行ったりしたことで、より合理的な判定や信頼性の高い結論を導き出すことができた。今後は、社会科の中で汎用的に使うことのできる概念的知識を解明し整理していく中で、概念的知識の習得や活用に基づいた年間指導計画の作成につなげていきたい。

また、本校社会科において重視する「多角的な見方」「民主主義」「公正」といった見方・考え方が、授業においてどのように意識的に活用されたのかをみとるために、振り返りをさせる際の指導言や、全体で共有すべき生徒の意見の取り上げ方、生徒の記述に対する教師のコメントの返し方などをさらに工夫していく。

3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- ディベートやランキング作成を行う場を設定し、意図的に立場や考えに違いが生まれるような手立てを講じることで、「多角的な見方」を自覚的にはたらかせることができた。これにより、当時の人々の立場や自分と対立する考えの立場などへの共感や理解を促すことに繋がった。また、学習課題を実際の社会で起こっている、あるいは起こりうる論争や議題にすることで、学習した内容がこれから社会参画をしていく自分にとって、生きてはたらくものとして活用できると実感した生徒が多く見られた。
- 様々な単元でツールミン・モデルを活用することで、根拠と理由付けを意識的に使い分けて考えを述べられるようになった。また、他の考えに根拠と理由付けがあるかどうかを見極め、指摘できるようになった。様々な考えの根拠と理由付けを比較することで、問題点や対立のポイントが見えるようになり、自分の考えを修正したり補強したりするために資料を読み返したり、新たな資料を探し求めたりする姿が見られるようになった。
- ▲学年や学習する時期、単元の学習内容などを考慮し、教師が判断基準を明示したり判断基準を意識化させる問いを発したりすることで、論点が明確になりより合理的な結論に至ったと実感する生徒が多く見られた。今後は、どのように生徒をみとり、どのタイミングで教師が出るのかといったコーディネートの方をさらに追究していく必要がある。
- ▲授業の終末や単元のまとめレポートなど様々な場面で振り返りを行い、学習内容を用いて具体的に書くよう繰り返し指導することで、学習した内容に基づいて概念的知識を表現できる生徒が多くなった。今後、生徒が獲得した概念的知識を汎用的に活用させるために、振り返った内容を見比べる場を設定するなど、変容を自覚させるための手立てが必要である。
- 横断的な単元構成や他教科との関連などカリキュラム・マネジメントを行うことによって、学習に深まりが生まれた。さらに科目間や教科間の連携を進めていきたい。